

まちびと

勿忘草

今夜は少し、肌寒い。黒いロングコートのボタンを首元まで留めても、冷気は容赦なく体温を貪り、その命を咀嚼していく。頬は梅のように紅色に染まった上、肩にかかる艶やかな黒髪の間から覗く肌は、彼女の名に相応しく、雪のように白かった。次々とホームに電車が到着し、人々が彼女を通り過ぎていく。時折、彼女の姿を見て惚けた顔で振り返る者もいた。それほどこの若い女の顔は美しく凛としていて、自分のことを凝視しながら前を横切る者がいようが、がっしりした体格の大きなリュックを背負った男にぶつかられてよろけようが、すぐに姿勢を正して、ひたむきに前を見つめ続けている。

上星雪は、さながら雪の中で咲き誇る梅の花の如く、出張でこの二週間家を空けていた夫の帰りを待っているのだった。

秋も深まり、冬將軍がやって来る日ももう近い。雪の体が生まれつき病気がちで、風邪を引くとこじらせることが多いことを知っている夫は「迎えに来てくれ」とは言わなかった。ただ「今日の夜帰る」とだけ伝え、電車の到着時間すらも書かず、淡々と今回の出張の成果を述べた。

二歳年下の夫——上星眼うえはしめの特性を、雪だつて理解していないわけではない。まだ結婚して半年も経っていないが、この振

る舞いが雪を氣遣つてのものだということはよくわかっている。だからこそ待つのが四時間だろうが五時間だろうが、例え深夜になつたつて夫が現れるのを待ちたかった。だから一つしかない入り口の、階段の前に立ち続けている。

開口一番に、彼がどんな言葉を発するのも予想できていた。彼は絶対に怒るだろう。あの怒つていても無表情でも大して変わらないような顔をむすつとさせて、静かに雪を叱るのだろう。雪はそれすらも待ち遠しかった。泣き黒子のある美しい顔をわずかにほころばせて、家の中での眼の様子を反芻させる。あれが二週間ぶりに見られるかと思うと、どこまでも口元は緩んでいくので、程々のところで我に返り、慌てて表情を戻した。かれこれ二時間ほどこれを繰り返している。ベンチに座ればいいものを、彼女はずつと二本のすらりとした足を休ませることのないままだった。それも雪なりの誠意で、夫の立ち振る舞いを真似たものでもあった。

眼は、滅多に笑うことがなく基本的には寡黙で、無駄なことを嫌う男である。まあそれでも童顔なので、言うことがどんなに厳しくても幾分か緩和されているはずだ。他人に厳しく自分にはさらに厳しく、年上にはどんな人間であろうと礼儀正しく接し、揺らぐことのない自分なりの信念を持つ男。いつでも背筋を伸ばし、しっかりと前を向いている。立ち姿だけでも、彼

の人間性が滲み出ているようだった。

雪も後輩である眼をてつきり亭主関白な人間だと思っていたのだが、結婚してからは勘違いだったのだとはつきりわかった。眼は一步でも家に入るとすぐに服を脱ぎ、下着姿でソファに寝そべるような人間ではなく、むしろ必要があれば料理も掃除もこなせる器用な男で、雪の体調が良くないときは家事を代わってもらふことすらある。その点は眼が母子家庭であり、自力で生活をしながらはいけないこともあったと聞いていたので、特に驚かなかった。意外だったのは、彼が何かに夢中になると自分のことがおろそかになるという面だった。

例えば、彼は読書家であるから自立するほど厚い本を読むことも珍しくないのだが、一度読み始めると食事にもなかなか顔を出さない、風呂にも入らない、入ったとしても髪を乾かさない。

結局雪が、まだいない子どもを相手にするように世話を焼くことになるのだ。いつもなら礼を言うのに、このときばかりは上の空である。それどころか「ご飯だよ」だの「髪ちゃんと乾かさないと風邪引くでしょ」だの、しつこくがみがみと言った暁には、本当に反抗期の男子中学生のように嫌そうな表情を浮かべて振り返る。そんな面も何だか可愛らしいと思ってしまうのは、自分が眼に惚れている証でもあるのだろう。眼はなかなかいないくらい硬派な男なのに、自分の前では幼顔をもっと幼

く見せるような、素直な表情を見せてくれるのだから。

またにもやついている自分に気づいて、雪はゆるゆると首を振った。まだかしら、と手袋とコートの間の腕時計を見やる。そろそろホットコーヒーを補給した方がいいかもしれない。ポケットに手を入れると、ちよつとした散歩用の小さなコインケースが指に当たった。まだ小銭が残っているはず。取り出そうとしたときだった。

新たな電車がホームに滑り込み、雪の前髪を定位置からずらす。のろのろと止まった電車から出てきた人間を見て、雪はポケットから手を出した。心臓が急に飛び跳ねて、本来の仕事を思い出したようだ。自分の顔がこんなにもコントロールできないのは初めてで「小躍りしたいくらい嬉しい」というのはこういうときに使うのか、と雪は妙に納得してしまった。

帰ったら作っておいたシチューを温めてパンと一緒に食べる。風呂にも入れるようにしておいて、きつとすぐに寝てしまうから布団も整えておくのだ。まだ会えたわけではないのに、今まで考えておいたことが一気に溢れ出して、最初に言おうと思っていた言葉すら押し流してしまった。

こちらへ歩いてくる人間に駆け寄って、悪戯でもしたかのようにはみのある微笑を見せる。

「お帰りなさい、旦那様」

その場でぼん、と出てきた言葉であった。まるで今まで自分は、本来これを言うためにここまで来たのだ、と言わんばかりに、何の違和感もなく、滑らかに出てきた。

スーツケースをひき、こちらも黒いロングコートの眼は、その姿を見てため息をついた。しかし雪が予想していた言葉は出てこない。苦笑して、諦めたようにこう返したのである。

「ただいま」

そうして雪の背に軽く手を当て、なだれて来る人々に巻き込まれない場所まで誘導してから、嬉しそうにしている雪と向かい合った。

「待たせてすまなかった」

「先輩」と呼んでいた時期もあるゆえに、妻となった雪にも敬語を使っていたのはようやく直せたようだ。メールでは常にこの口調であったせいかもしれないが、改めて耳に入ると新鮮なのはなぜだろう。

「私が勝手に待っていたのよ」

自分でも恥ずかしく思うくらいに、声が弾んでいるのがわかった。自分は今とてもだらしない顔をしているのだと思うと、すぐに顔を覆ってしまいたい衝動に駆られる。しかしそうなる
と眼の顔が見えなくなってしまう。

雪は眼の両手を握るとうつむいて、上目づかいになりながらもう一度、お帰りなさいと囁いた。